

## 日記の内

備後國 岡田美知代  
上下町

廿三日、玉の如き晴天なれど今日も又頭痛、斯うして毎日、何もせず、唯茫然として行くかと思ふと堪らなく悲しい、けれ共仕方が無い。朝二郎を貢ふして裏門より川原に行く、途行く子らは皆著更して中には結立の髪艶々しう、いつになく紅白粉なまめきたる村娘もある。何事かと考へると舊曆正月廿日、俗に云ふ一日正月のそれなのだ。かゝる時かかる場合、文學者は直ちに寫生を試みるのであらう、藤村氏綠葉集の自序にも——身のまばりから始めて眼に映じた儘、心に感じた儘を寫して見ようと思ひ立つた——とある。不斷の修養、實に不斷の修養、それでこそ七年田園生活の紀念として、綠葉集の如き勝れたるをもお残しなすつた。引かへて私はあゝ私は今皆日記を記さうとして、目のあたり思ひ浮べ得るのは唯枯葉。野はまだ冬枯の儘に、蔘さへ漸く二寸、城山には猶處々雪を見れ共、霞は低う地を這ひて、日影うらゝかな橋詰に蕙布いて小供等の飯事遊びせる、上流の雪解けて俄に河瀬の音烈しうなりたる。それ位なもの。殘念ながら其外には、いつも羨しき紅梅咲かする瀧平婆の宿近う來ながら、其當の如何をもつゆ思はで過ぎた。何と云ふ平凡、何といふ不用意！要するに私はほんやりなんだ。二十四日、朝より春雨しめやかに降りしきり讀書により、うみて障子を開けば、家森田畑雨にしぶきて、遠き山々のみどり煙るかとはかり優かに見える。午後文章世界着、待ちに待つた落が無いので失望。星湖の作は確かに佳い。山

中の靜かなる雪の夜、ゆくりなくも只一人自覺しかつたお輝、覺めての後如何にかするなど、今の我が身に比べて人事ならす思ひ思はれる。三時頃其枝さんわざ／＼傘さしてのおこし、何を仰有るかと思へば、又もお嫁入りの日取り早まりて來月二十八日に定つてよと、格別親しい仲と云ふでも無いに可笑しな人。而して我々今の女が新しき教育をうけながら尙家庭に入つて困るのは、無暗に智識ばかりが進んで居て經驗に乏しいからだと思ふ。果して我等に智識があるであらうか、若しありとすればそれは唯豚の智識と相同じきもの、食ふ事、眠る事、それ以外に何が有らう。何とか皮肉を云つて大に罵倒して見ようかとも思つたが、結局其枝さんのおめでたさが羨しくなり、何故私は斯うもだ／＼してわれと悶えわれと苦しむのか、只の一日で可い、世間の女と同じに飲み食ひして、それを此上も無い快樂と思ひなして見度い、あゝ何を悶え何を苦しむ、悶えても苦しんでもどうせ豚なんだ、とやうな云ひ知らぬ悲哀に泣かる。夜先生よりお葉書たまふ。

露のこゝろまだ寒き山中の里居漸しき人をこそ思へ。とあるに、今更ながら御情けの程悲しく、

いや戀し御歌誦しては佗佳の夕得堪へず涙流るい。

評 達者な筆を取る。けれど今少し細かく書いて欲しい。細かく書くことと疎く書くことの骨は中々難かしいものだが、此邊に少し心を用ゐると好いと思ふ。